

# 山口県における障害児教育の歩みと発展（その4）

—山口大学教育学部附属養護学校—

名島 潤慈

## The history of educational development of children with disabilities in Yamaguchi Prefecture (4): Focusing on the School for Children with Disabilities Attached to the Faculty of Education of Yamaguchi University

Junji NAJIMA

### I はじめに

山口県における障害児教育の歩みとしてこれまで盲・聾学校と特殊学級、院内学級と特別支援学校（総合支援学校）、1960・1970年代における山口県教育委員会の役割と機能について展望してきたが、本稿では養護学校が義務化された1979（S54）年4月1日に創設された山口大学教育学部附属養護学校（以下、附属養護学校）を取り上げる。この附属養護学校の目的として第二代校長の入枝脩は、「本校は大学学部学生の教育実習の場として、あるいは大学における研究の実証の場としてあるだけでなく、山口県中部地区の精神薄弱養護学校としての役割を期待されて出発し、義務教育の段階は勿論、後期中等教育の段階にある重度・重複障害の子ども達に対して、適切な教育を実施することが求められているのであります。」と大変分かりやすく要約している（入枝，1988）。

附属養護学校の歴史等に関する基本文献としては、『創立10周年記念誌 十年の歩み』（国久ら編，1988）、『創立20周年記念誌 二十年の歩み』（三輪ら編，1998）、『創立30周年記念誌 三十年の歩み』（竹本ら編，2008）、『創立40周年記念誌』（小林ら編，2018）を用いる。本稿の記述で特に出典を明記していない箇所は、これらに依拠している。なお、文中では人名の敬称は略し、年号は「1968(S43).9.12」のように西暦を基本とし、必要に応じて日本暦を付す（数字の前のSは昭和、Hは平成）。また、精神薄弱養護学校、特殊学級、異常児等、当時一般に用いられていた歴史的表現を用いる（「精神薄弱」という用語は1999年4月から「知的障害」に統一されたので、1999年4月以降の記述では「知的障害」を用いる）。人名の「さなだ・もとすけ」について言えば、資料には「眞田元祐」と「真田元祐」の2つの表記が見られるが、本稿では「眞田元祐」に統一する。文中の記述に関して注釈が必要な場合には、適宜〔 〕のなかに書き入れる。

附属養護学校は2007(H19)年4月1日に「山口大学教育学部附属特別支援学校」に改称されたが、本稿ではもっぱら附属養護学校の時代に焦点をあてる。ちなみに、附属養護学校が設立された1979年4月1日の生徒数は10名（小学部4名、中学部6名）、2007年4月1日の生徒数は46名（小学部6名、中学部11名、高等部29名）であった。

## Ⅱ 山口大学教育学部附属養護学校の設立まで

### 1. 山口大学教育学部養護学校教員養成課程の開設

亀井（1969）によれば、1960（S35）年か1961（S36）年頃山口県の小・中学校長会から教育学部長に特殊教育に理解のある教員を養成してほしいとの要望書が出されたり、「手をつなぐ親の会」等から精神薄弱教育の必要性が叫ばれたりしたので、山口大学教育学部では教育学や教育心理学の教官が手分けして「特殊教育原理」「特殊教育方法」「特殊児童の心理」「特殊児童の測定と診断」等を開講した。その頃には既に、他県では養護学校教員養成課程の設置が見られた。また、1963年には「日本特殊教育学会」が創設された。

表1に記したように、山口大学教育学部において養護学校教員養成課程が開設されたのは、1966（S41）年4月1日であった。独立行政法人国立特別支援教育総合研究所の「昭和48年度特殊教育資料」([http://www.nise.go.jp/kenshuka/josa/horei/tk\\_data\\_s...](http://www.nise.go.jp/kenshuka/josa/horei/tk_data_s...))に従えば、養護学校教員養成課程の設立は、古いものから順に挙げると次のようになる（大学名の次の括弧内は設立年月日）。1番目が東京学芸大学・広島大学（以上は1960.4.1）、3番目が北海道教育大学・静岡大学（1962.4.1）、5番目が京都教育大学・大阪教育大学・熊本大学（1963.4.1）、8番目が金沢大学・山梨大学・愛知教育大学・高知大学（1964.4.1）、12番目が弘前大学・山形大学・千葉大学・福井大学・岐阜大学・鳥取大学・岡山大学・香川大学（1965.4.1）。そして、20番目にあたる山口大学教育学部養護学校教員養成課程は、茨城大学、三重大学、神戸大学、奈良教育大学、島根大学、徳島大学、福岡教育大学、大分大学と共に1966年4月1日に開設された。この山口大学教育学部養護学校教員養成課程に入学した学生たちが4年間で履修すべき科目と単位数については、表2に掲げた。

亀井（1969）によれば、山口大学教育学部養護学校教員養成課程に入学した学生たちは勉学の傍ら、山口県このみ園（宇部市大字東須恵）や社会福祉法人城南学園（山口県熊毛郡田布施町）の園児たちと生活を共にしたり（前者は1968年9月、後者は1969年9月）、1968（S43）年10月に山口市のデパート「ちまきや」の二階で開催された山口県精神薄弱児作品展の資金集めや実施を中心となって行ったり、附属山口小・中学校の特殊学級の児童生徒と交流したりした。[山口県このみ園は宇部市の常盤台にあった精神薄弱児入所施設の山口県ときわ学園が1965年4月1日に宇部市の東須恵（現在の呼名は黒石北）に移転されたもので、同じ日に設立された山口県立養護学校（現在の宇部総合支援学校）に隣接。城南学園は、1959年2月10日に精神薄弱児入所施設として発足（理事長は吹田愷）。この城南学園には、1959年5月1日に田布施町立城南小学校城南学園分校、1959年6月1日に田布施町立城南中学校城南学園分校が併置された。なお、これら二つの分校は1977年4月1日に山口県立田布施養護学校が開設すると共に田布施養護学校に統合された。][亀井（教育学部養護学校教員養成課程主任）はまた、①小学校の特殊学級担任教員と中学校の特殊学級担任教員との自由な交流、②幼稚園や保育園における幼児特殊学級の設置、③言語障害や自閉症等の治療教育に関する研究機関の設置、④山口県の僻地における特殊教育の振興、⑤施設やコロニー等の充実といった希望を述べている（亀井，1971）。]

表 1 山口大学教育学部附属養護学校の歴史

年月日	山口大学教育学部附属養護学校	関 連 事 項
1949(S24).5.31.		山口大学発足。山口青年師範学校と山口師範学校が山口大学に統合され、山口大学教育学部となる。
1965(S40).4.1.		山口県立養護学校（後の宇部養護学校）開設。
1966(S41).4.1.		山口大学教育学部に養護学校教員養成課程開設（定員 20 名）。
1966(S41).4.1.		山口大学教育学部附属山口小学校に特殊学級（精神薄弱）を 1 学級開設（低学年）。
1967(S42).4.1.		附属山口小学校特殊学級に特殊学級を 1 学級（高学年）増設。
1968(S43).4.1.		附属山口中学校に特殊学級（精神薄弱）を 1 学級開設* <sup>1</sup> 。
1972(S47).4.1.		山口県立防府養護学校開設。
1974(S49).4.1.		山口県立豊浦養護学校開設。
1977(S52).4.1.		附属山口小学校特殊学級に 1 学級（中学年）増設。3 学級編成となる。
1978(S53).3.1.		山口県立田布施養護学校開設。
1979(S54).4.1.		山口大学 6 代目学長小西俊造が就任。
1979(S54).4.10.	山口大学教育学部附属養護学校開設。校長は眞田元祐* <sup>2</sup> 、副校長は上田文男* <sup>3</sup> 。	養護学校の義務制が実施される。
1979(S54).4.10.	附属山口小学校体育館にて第 1 回入学式* <sup>4</sup> 。	
1980(S55).3.18	第 1 回卒業式（卒業生は中学部 1 名）。	
1980(S55).4.1.	高等部 1 学級を新設（第 1 学年）* <sup>5</sup> 。	
1980(S55).4.30.	第 1 回 PTA 総会。	
1980(S55).5.12.	山口市大字吉田 3003 番地の新校舎に移転。	
1980(S55).6.2.	学校給食開始。	
1980(S55).10.12.	第 1 回附養祭を開催（実行委員長は内野和夫）。	
1982(S57).7.7.	進路指導懇談会（以後毎年実施）	
1983(S58).3.2.	「くすの木会」（同窓会）の設立* <sup>6</sup> 。	
1983(S58).5.	水泳プールを新設。	
1986(S61).1.31.	『障害児教育と個人指導プログラム』を出版。	
1995(H7).2.22.	日常生活訓練施設の「芙蓉館」竣工。	
1996(H8).3.20.	情報教育用パソコン 8 台を視聴覚室に設置。	
1996(H8).5.1.	マルチメディア対応 ATM ネットワークシステムの導入に伴って情報ネットワークの構築と、山口大学の学内 LAN への接続を行う。	
2003(H15).4.	個別の教育相談活動「のびのび」を開設。	
2004(H16).4.		国立大学法人法の規定によって、国立山口大学が「国立大学法人山口大学」となる。
2006(H18).5.11.	幼児教育相談室「わくわく」開設（定員 10 名）。	
2007(H19).4.1	校名が「国立大学法人山口大学教育学部附属特別支援学校」となる。	「特別支援教育」が始まる。盲・ろう・養護学校ごとの教諭免許状が特別支援学校教諭免許状に一本化される。
	地域支援コーディネーターを設置。	

\*<sup>1</sup> 以後学年進行により、1969.4.1 と 1970.4.1 にそれぞれ 1 学級を増設して 3 学級編成となる。

\*<sup>2</sup> 初代校長の眞田は 1979 年 4 月 16 日～1985 年 4 月 15 日までの 6 年間その職にあった（1979 年 4 月 15 日までは岡村義彦教育学部長が校長事務取扱となった）。眞田は山口大学を定年退職後、1988～1994 年度まで山口芸術短期大学の教授となり、その間学生部長も兼ねた（原田ら編、2018）。なお、附属養護学校の第 2 代校長は入枝脩、第 3 代岩崎貞徳、第 4 代横山省三、第 5 代堂野佐俊、第 6 代横山省三、第 7 代松田信夫、第 8 代名島潤慈、第 9 代松田信夫、第 10 代友定保博、第 11 代今田浩、第 12 代藤岡直樹。第 10 代校長までは教育学部教授との兼職であったが、2015（H27）年度、第 11 代今田浩校長から常勤化した（山口県教育委員会の派遣による校長・教頭の週 5 日

制勤務となった)。

- \* 3 初代副校長の上田は定年退職までの11年間、附属養護学校に勤務した。
- \* 4 入学は小学部1年生が2名、中学部1年生が4名であった。
- \* 5 附属山口中学校の教室を借りて高等部がスタート、計6名の生徒(中村, 1988)。教官は三枝啓巳・宮木安子・中村恒愛の3名。
- \* 6 附属養護学校の卒業生たちの集まりである「くすの木会」は以後年に1回開催されたが、会員数も増えたため1991(H3)年度からは原則として月に1回程度開催。内容は、ボウリング大会・カラオケ大会・総会・ふよう祭りの準備と参加(バザー出店)・成人を祝う会・平川駅伝参加・新入生歓迎会など。

表2 山口大学教育学部養護学校教員養成課程における必要修得単位\* (亀井, 1969より作成)

	科目名	単位	備考
異常児教育	特殊教育原理	2	必修
	特殊教育方法	2	必修
	特殊教育社会学	2	必修の4単位を含めて最低8単位を修得する
	特殊教育行政及び管理	2	
	異常児の職業指導	2	
異常児心理	異常児の心理	2	必修
	異常児の診断と測定	2	必修
	臨床心理	2	必修の4単位を含めて最低8単位を修得する
	相談心理	2	
	異常児精神検査	2	
	異常児精神衛生	2	
異常児病理	異常児の病理	2	必修
	精神病理学	2	
異常児保健	異常児の保健	2	必修
	環境衛生学	2	
	異常児の教育実習	4	必修
	卒業研究 (特殊教育に関するもの)	5	必修

\* 授業科目の「特殊教育原理」から「異常児の教育実習」までのうち、必修単位を含めて最低24単位以上を修得しなければならない。さらに、「卒業研究」5単位も必修である。

## 2. 山口大学教育学部附属山口小・中学校の特殊学級(精神薄弱)の開設

1966年4月1日に山口大学教育学部養護学校教員養成課程が開設されたが、同日、山口大学教育学部附属山口小学校(山口市白石)に特殊学級(精神薄弱)が1学級(低学年)開設され、翌年の4月1日にはさらに1学級(高学年)が増設された。そして、1974(S49)年4月1日にはまた1学級(中学年)が増設されて、3学級編成となった。

一方、1968(S43)年4月1日には教育学部附属山口中学校(山口市白石)に特殊学級(精神薄弱)が1学級開設された。以後、学年進行によって、1969年4月と1970年4月にそれぞれ1学級増設されて3学級編成となった。

### 3. 山口大学教育学部附属養護学校の開設

1977 (S52) 年 7 月 5 日の日付で、山口県教育委員会教育長井上謙治から、山口大学学長中村正二郎に対して、「山口大学教育学部附属養護学校の早期実現について」という要望書が提出された。それを受けて、1978 (S53) 年 10 月には、山口大学教育学部に養護学校設置準備委員会が設置された。委員は、岡村義彦教育学部長、評議員、学生委員、附属山口小学校長、附属山口中学校長、養護課程科主任、各教科群からの 5 名という構成であった。

1979 (S54) 年 4 月 1 日に養護学校の義務制が実施されたが、同じ日、附属山口小学校と附属山口中学校の両特殊学級を母体として、附属養護学校が開設された（特殊学級の教員は全員が附属養護学校に移籍。開設当時の教育学部長は岡村義彦）。翌年の 1980 (S55) 年 5 月 12 日に山口市大字吉田 3003 番地にできた新校舎に移転するまでの約 1 年 1 か月間、小学部は附属山口小学校を、中学部は附属山口中学校を間借りした形であった。ちなみに、高等部は 1980 年 4 月 1 日に 1 年生が開設され（5 月 11 日までは附属山口中学校を間借りした）、その後学年進行で 1982 年 4 月 1 日に全学年が充足された。

さて、1979 年 4 月 10 日、附属山口小学校体育館において小・中学部の新入生計 6 名の入学式が行われた。1979 年度の全体構成は、小学部児童が計 4 名（1 年生 2 名、2 年生 1 名、4 年生 1 名）、中学部生徒が計 6 名（1 年生 4 名、2 年生 1 名、3 年生 1 名）であった。教職員等は計 17 名（教官は校長・副校長を含めて 12 名）であった。校医・歯科医・薬剤師については、小学部は附属山口小学校、中学部は附属山口中学校のそれぞれが兼務した。なお、附属山口小学校の特殊学級にいた児童のうち 8 名は附属山口小学校を卒業したいという保護者の反対で附属養護学校に移籍しなかったため、この 8 名に対しては附属養護学校の小学部の教員が 1984 年度まで附属山口小学校で教えた（国久ら編、1988）。

附属養護学校の初代校長は、山口大学教育学部教授の眞田元祐（1925-2010）（教育学・障害児教育）であり、初代副校長は教育庁指導課指導主事から転任してきた上田文男であった。その他、開設時の教員は、山根省二、松田雅、古谷良章、三輪研一郎、福重悦子、三枝啓巳、古谷正明、天久猛次、藤三和子、古田千鶴江（養護教諭）であった。〔古谷正明は古谷良章と共に小学部低学年の「ふたば学級」を受け持ち、3 人の児童から「ヒトの排泄作用のメカニズム、自閉症の行動特性、乳幼児期の発達心理」などについて多く学んだ（古谷、1988）。〕〔岩国市立杭名小学校から転入してきた古田千鶴江は定年退職までの 29 年間、養護教諭として附属養護学校に勤務した。古田は社会に巣立っていく卒業生たちに対して、例えば「持病のある者で長期に薬を服用している場合薬物の影響で慢性の便秘になりやすいので、野菜、果物等の繊維類を多くとるようにする。てんかん患者の場合、コーヒー・茶等は普通にとってよいが、酒類は控える。また、抗てんかん薬以外の薬を服用しなければならなくなった場合、勝手に断薬すると発作の重積をおこすことがあるので、抗てんかん薬は常に継続服用すること。服薬を忘れた場合気づいたらすぐ服薬し、一日分の量は当日中に服用する」という実際的なアドバイスをを行っている（古田、1990）。〕

初代校長の眞田はもともと山口県教育庁総務課で働いていたが、1964 (S39) 年 4 月 1 日から山口県教育庁管理課特殊教育係の係長となった（眞田、1971）。そして、山口県特殊教育振興 10 か年計画（昭和 39-48 年度）の仕上げ作業に加わり、山口県特殊教育振興 10 か年計画が樹立さ

れてからは山口県の最初の養護学校である山口県立養護学校の設計・建設に従事した。山口県立養護学校が宇部市に開設されたのは、1965年4月1日であった。

〔眞田は山口県立養護学校開設の前年、国際教育会（信越化学工業の小坂徳三郎が主宰）がアメリカのコロンビア大学の Herbert Passin 教授らと組んで計画した「現場教師米国短期留学プロジェクト」(山本, 2007)に参加している。具体的には、1964年8月8日から11月4日の約3か月間、眞田は他の教師たち29名と共に民泊しながらアメリカ各地の教育事情を視察した。Fグループに所属していた眞田は参加者たちが書いた『現場教師の見たアメリカの教育』のなかで、ニューヨーク州ノース・シラキュース (North Syracuse) 学区における精神薄弱児教育の実際について詳しく報告している (眞田, 1965)。〕

ところで、1979年4月1日に附属養護学校が開設された当時の学長は、小西俊造 (1918-2012) であった。小西は前年の1978年3月1日に6代目学長に就任していたが、附属養護学校が開設されると障害児教育に深い関心を示し、附属養護学校のPTAで講義したり、保護者からの相談にのったりした (眞田, 1998)。これは小西が小児科医の教授 (山口大学医学部小児科学教室第4代教授) であったことによるが、このような学長の強力な後ろ盾があったことは附属養護学校の出発点として大変心強いことであつたらう。自閉症の約7割に精神薄弱が合併していると言われるので、小西は精神薄弱のみでなく、自閉症についての相談にもものっていたものと推測される。〔小西は金原出版から、1965年6月10日に『小児科学提要』を、1976年3月25日に『小児科学提要 改訂第2版』を出版している。1965年の本では、精神薄弱については「第11章 神経系疾患」のなかの「E. 精神薄弱」の節で述べ、自閉症については「第17章 精神身体学的疾患」の末尾に附録として「小児精神病」というタイトルを置き、その小児精神病を①「幼児早期自閉症 (early infantile autism)」と②「小児分裂病 (schizophrenia)」の2つに分けている。一方、1976年の本では、精神薄弱については「第20章 神経系疾患」のなかの「E. 精神薄弱」の節で述べ、自閉症については「第24章 精神身体学的疾患」のなかの「5. 小児精神病」の節において、①「小児自閉症 (childhood autism)」、②「幼児の共生精神病 (symbiotic infantile psychosis)」、③「小児分裂病 (child schizophrenia)」という3つのなかの①で述べている。現在の視点からすれば、幼児早期自閉症・小児自閉症が小児精神病の節に入れられているのは妙な感じがする。しかし、精神医学の診断体系において、精神障害とは異なる「発達障害 (developmental disorder)」という概念の本格的登場は、APAが1980年に発行したDSM-IIIからである。もともと早期幼児自閉症を報告・命名したKanner (1943, 1944) は、早期幼児自閉症と小児の精神分裂病 (統合失調症) との関係について、いろいろと迷った末に2つは別のものであるとした (Kanner, 1973を参照)。その意味では、自閉症と小児分裂病とを区別した小西の分類は首肯できる。しかし、小西が自閉症を小児精神病というカテゴリーのなかに含めたのは、発達障害という概念がまだなかったこともあるが、小西がKannerの迷いのうちの精神病寄りの見方 (早期幼児自閉症と小児の精神分裂病が重なり合うのであれば、後者は精神病のなかに入るの、したがって前者も精神病に入ることになる) をより拡大させたということがあつたのかもしれない。ちなみに、WHOが1977年に出版したICD-9では、「特に小児期におこる精神病 (psychoses with origin specific to child)」として、①「幼児自閉症 (infantile autism)」、②「不統合精神病

(disintegrative psychoses)」、③「その他 (other)」、④「詳細不明 (unspecified)」に分けている。この点からすれば、幼児の自閉症を精神病の範疇内に含めることは30年以上もの間、世界を代表する精神医学においてなされていることであり、したがって小西もそれに沿ったと言えるかもしれない。][Kannerは1972年に*Child Psychiatry*の第四版を出版している。それを見ると、Kannerは「第52章 精神分裂病」の章でまず大人の精神分裂病について解説し、その後、①小児の精神分裂病、②早期幼児自閉症、③幼児共生精神病に分けている。この3つの分け方は小西が1976年に出版した『小児科学提要 改訂第2版』における分け方と同じである。もっとも、小西では「小児自閉症」という名称になっているが、しかし、小西の1965年の『小児科学提要』では「幼児早期自閉症」としているので、小西にあっては、小児自閉症と幼児早期自閉症 (Kanner自身の用語はearly infantile autism 早期幼児自閉症)は同じものとみていた。なお、Kanner(1972)自身が述べているが、幼児共生精神病はMargaret S. Mahlerの用語である。つまり、Mahlerは子どもの精神病を早期幼児自閉症と幼児共生精神病の二群に分けたが、Kannerはその分け方を取り入れて合計3つに分類し、その分類法を小西はそのまま踏襲したと言えるかもしれない。]

#### 4. 附属養護学校2年目と新校舎への移転

附属養護学校は1980(S55)年4月から2年目に入った。生徒数は計26名(小学部12名、中学部8名、高等部6名)、教職員等は計23名となった。

高等部は、この1980年が発足の年であった。最初は附属山口中学校の教室を借りてのスタートで、5月12日には山口市大字吉田3003番地にできた新校舎に移った。高等部の生徒6名のうち1名は附属養護学校中学部の卒業生で、残りは他校からの新生徒であった。この年の4月に山口県立聾学校から附属養護学校の高等部主事に転任してきた中村恒愛は、高等部の生徒たちは防府市や美祢郡美東町など遠くから初めて1人で通学するので登下校の心配が大変で、例えば小雨が降るなか、暗くなっても女子生徒が家に帰らないので探し回ったりしたという(中村, 1988)。また、1984年4月に転任してきた石本正之は、「附属養護学校に着任した頃の私の朝の日課という、湯田へ車で子どもを迎えに行くことでした。市外からのバス通学が多く、乗り遅れたり、乗り過ぎたりする子どもがいたからです」と回想している(石本, 1998)。

ともあれ、それまで附属山口小・中学校に間借りしていた附属養護学校は1980年5月12日、山口大学(山口市大字吉田)に隣接する新しい校舎に移転した。この附属養護学校の新校舎はもともと、山口市内の一級地とも言える、現在の山口県立美術館(山口市亀山町)の前の公園に建てられる計画であったが、地域等の人々の反対で転々とし、現在地に建てられることになったという(上田, 1988)。

新校舎の建物の配置は、事務室や校長室・保健室などがある棟に小学部があり、それとは別の棟に、中学部と高等部がある。高等部のみ二階で、中学部の真上にある。眞田(1998)によれば、基本方針として校舎は平屋建てとし小・中・高等部別に分けて設置することであったが、敷地の都合から高等部を二階とせざるを得なかった、しかしそれ以外の点では教職員の意見や希望が山口大学施設部の行った建築設計に積極的に取り入れられたので満足感があったという。[後の1995年に竣工した芙蓉館をも含めると、附属養護学校の建物の建面積は2,779m<sup>2</sup>、延面積は3,539m<sup>2</sup>、土地は20,645m<sup>2</sup>である(www.yamaguchi-u.ac.jp/.../19\_h26-land-and-buildings.pdf よ

り)。」]

新校舎に移転した当時の様子について福原（1998）は、「教職員 21 人、生徒 26 人が 5 月に新校舎に移転し、進路指導の三枝教官、研究の天久教官を中心に附養の基礎づくりが始まりました。（中略）三枝教官や三輪教官たちと夜遅くまで一輪車で真砂土を運び、初めて作ったサツマイモに朝顔のような花が咲きました。校門のクスノキだけで何も無い学校でした。」と回想している。ちなみに、年に一度の職員旅行について言えば、1979 年 12 月のそれは附属山口中学校と合同の職員旅行（能登半島）であったが、1980 年 8 月のそれは附属養護学校のための職員旅行（隠岐）であった（上田，2018）。その他、移転して 3 週間後の 6 月 2 日から学校給食が開始された（給食調理員は田村美喜子と大玉優子）。

### Ⅲ 山口大学教育学部附属養護学校の活動

#### 1. 個人指導プログラムに基づく教育課程の研究

表 3 は、附属養護学校における研究のあゆみである。最初の 1979（S54）年度は附属養護学校と言っても附属山口小・中学校に間借りしていた形であった。当時の状況について天久（1988a）は、「特殊学級時代の研究は附属山口小・中の体制に組み込まれていたため、共通のテーマで研究をすすめたことがなく、私達は戸惑いの内に『実態把握の方法』について実践研究を展開した。9 名の教官はそれぞれ指導案を作成したり、1 つの提案に 5 時間 6 時間をかけて協議したりしたことが思い出される」と回顧している。

ところで、附属養護学校における教育課程の研究について言えば、最初の 1979～1982 年度の研究主題は「力いっぱい生きる子どもを育てる教育課程の編成」であった。個別の指導プログラムが必要なのではないかという共通認識が生まれつつも、基本的には各学部単位の研究であったため、研究の手法や手順がそれぞれに異なっていた。しかし、次の 1983～1985 年度においては個々人の発達課題を中心にすえた研究が進められ、その結果、学部・学年の枠を外し、個々のニーズに応じた学習集団が設定され、集団ごとの内容が設定された（国久ら編，1988）。

ともあれ、附属養護学校が開設された 1979 年度から 1985 年度までの 7 年間、教育課程の研究は附属養護学校での計 4 回の研究協議会や 1 回の研究発表会を経て深められ、そして「第二回特殊教育研究発表会」の直前、1986 年 1 月 31 日に『障害児教育と個人指導プログラム—教育課程の編成とその実践』が山口大学教育学部附属養護学校編著で第一法規から出版された。これは、本文 466 ページという大著であった。「研究発表会まで半年のタイムリミット、夏休み無しの全員作業となった。荷が届いたのが研究会 4 日前、綱渡りの数箇月であった」という（天久，1988a）。

天久（1988b）によれば、附属養護学校の教育課程の特徴は、①指導カルテ（個人指導プログラムのこと）を作成し、これを最大限に具現するような教育課程を編成する、②個々の学習者の指導内容を領域・分野として組織する、③従来の暦年齢による学級を廃し、学習者個々の到達可能程度を主な視点として生活集団（基礎集団）を編成する、といったものであった。[①の指導カルテは 4 つの表から成る。指導カルテ I 表は医学的所見や心理検査の結果、生育歴などの基本的な情報のファイル、II 表は発達の水準と到達（習熟）の程度を明らかにしたもの、III 表は総合

表3 山口大学教育学部附属養護学校の研究のあゆみ\*<sup>1</sup> (竹本ら編, 2008; 小林ら編, 2018より作成)

年度	研究主題と研究内容	備考
1979(S54)	かいっぱい生きる子どもを育てる教育課程の編成 1年次 実態把握の内容と方法を探る	
1980(S55)	2年次 児童生徒の実態を探る	1981.2.10. 第1回特殊教育研究協議会
1981(S56)	3年次 実態把握に基づく全体構造の組み立て	1982.2.10. 第2回特殊教育研究協議会
1982(S57)	4年次 個に即した教育内容の明確化と効率的な学習指導の組織	1983.2.8. 第一回特殊教育研究発表会
1983(S58)	学習者個々の実態に即した教育課程の展開 1年次 養護学校教育12年間を見通した教育課程の再考	1984.2.7. 第3回特殊教育研究協議会
1984(S59)	2年次 学習指導の方法研究を中心とした教育課程の実践的検証	1985.2.5. 第4回特殊教育研究協議会
1985(S60)	3年次 個人指導プログラムに基づく教育課程の編成とその展開	1985.5. 「個人指導プログラムに基づく教育課程の編成」を執筆* <sup>2</sup> 1986.1.31. 『障害児教育と個人指導プログラム』を出版 1986.2.4. 第二回特殊教育研究発表会
1986(S61)	学習者個々の心理特性に応じた学習指導の改善 1年次 学習者(抽出)の心理特性に応じた学習指導のあり方を求めて	1987.2.3. 第5回特殊教育研究協議会
1987(S62)	2年次 心理特性に応じた教授-学習過程のあり方を求めて	1988.2.2. 第6回特殊教育研究協議会
1988(S63)	3年次 個々の学習者を生かす学習指導の実践的検証	1989.2.28. 第三回特殊教育研究発表会
1989(H1)	個々の学習者の育ちを見通した学習指導のあり方を探る	1990.2.1. 第7回特殊教育研究協議会
1990(H2)	今、教育課程を見直す 1年次 学習内容一覧表の改訂	1991.2.1. 第8回特殊教育研究協議会
1991(H3)	2年次 学習内容一覧表の各項目の課題分析 学習集団の再編成と分野の概要(指導計画)の改訂	1992.2.7. 第9回特殊教育研究協議会
1992(H4)	3年次 見直された教育課程に基づく授業実践Ⅰ 個人指導カルテの改訂	1993.2.5. 平成4年度特殊教育研究協議会
1993(H5)	4年次 見直された教育課程に基づく授業実践Ⅱ 性教育に関する教育課程の見直し	1994.2.10. 平成5年度特殊教育研究発表会
1994(H6)~ 1995(H7)	個人指導プログラムに基づく教育活動の展開-個人・グループ研究を中心に ①性教育・問題行動 ②教育課程 ③パソコン ④進路指導 ⑤作業学習 ⑥重度・重複障害、養護・訓練	1996.2.6. 平成7年度障害児教育研究協議会
1996(H8)	個人指導プログラムに基づく学習指導の組織化と展開 1年次 児童生徒の課題と生活から週課表を見直す	1997.2.7. 平成8年度障害児教育研究協議会
1997(H9)	2年次 生活する力を育てる学習指導の展開Ⅰ *平成8・9年度学部附属共同研究報告書『個々の教育的ニーズに応える指導システムの構築-個人の特性への支援を具体化した授業実践とその検討を通して』	1998.2.6. 平成9年度障害児教育研究協議会
1998(H10)	3年次 生活する力を育てる学習指導の展開Ⅱ	1999.2.5. 平成10年度障害児教育研究発表会
1999(H11)	「生活する力」を育てるための個人指導プログラムの充実をめざして 「生活する力」を育てるために必要な実態把握の方法や授業設計について	この年度は研究集録のみ発行し、研究協議会是不実施

2000(H12)	個人指導プログラムに基づく「総合的な学習」の展開— 一人一人の「豊かな生活」を目指して 1年次 「豊かな生活」の観点から「総合的な学習」の 捉えや、活動の仕組みについて検討し明らかにする	2001.2.9. 平成 12 年度障害児教育研究協議 会
2001(H13)	2年次 実践を通して子どもの変容の様子について考察 し、より効果的な「総合的な学習」のあり方について検 討する	2002.2.8. 平成 13 年度障害児教育研究協議 会
2002(H14)	一人一人の「豊かな生活」を目指した「総合的な学習」 の展開（教育課程変更のため改題） 最終年次 「豊かな生活」を目指した「相互的な学習の 時間」のあり方についてまとめる	2003.2.7. 平成 14 年度障害児教育研究発表 会
2003(H15)	一人一人が生き生きと学習する授業づくりを目指して 1年次 一人一人に応じた支援のあり方について実践を 中心に取り組む 小学部：一人一人が生き生きと活動する生活単元学習 について 中学部：知的障害養護学校* <sup>3</sup> における自立活動のあ り方 高等部：一人一人の思いや願いを大切にされた作業学習 のあり方	2004.2.6. 平成 15 年度障害児教育研究協議 会
2004(H16)	最終年次 児童生徒一人一人が生き生きと取り組める授 業づくりについて、授業の組み立て方や、支援のあり方、 評価のあり方をまとめる	2005.2.4. 平成 16 年度障害児教育研究発表 会
2005(H17)	子どもたちの豊かな生活の実現を目指して 1年次 教育的ニーズの把握に焦点を当てて 小学部：教育的ニーズに応える授業づくり 中学部：教育的ニーズに応える生活単元学習のあり方 高等部：一人一人の思いや願いが広がる授業づくり	2006.2.3. 平成 17 年度特別支援教育研究協 議会
2006(H18)	2年次 教育的ニーズに応える授業づくり 小学部：支援のあり方を子どもたちから学びとる 中学部：教育的ニーズに応える生活単元学習のあり方 （2年次） 高等部：一人一人の思いや願いが広がる授業づくり（2 年次）	2007.2.2. 平成 18 年度特別支援教育研究大 会
2007(H19)	最終年次 教育的ニーズをふまえた生活づくり 小学部：子どもの思いや願いが広がる生活を目指す 中学部：豊かな生活につながる生活単元学習づくり 高等部：授業を生活に一思いや願いの形成と実現を目 指して	2008.2.8. 平成 19 年度特別支援教育研究大 会
2008(H20)	「考える力を育てる」授業づくり（3年計画） 1年次 「豊かな生活」の実現に必要な「生きる力」を 明らかにし、子どもたちの「考える力」に関する実態を 捉える 小学部：1対1での学習場面を通して「考える姿」を 見つめる様々な「選択場面」を取り入れながら 中学部：子ども一人一人の考える力を活かす—個別学 習を通して実態を把握しながら 高等部：子どもが主体的に活動に取り組む姿から「考 える力」を探る	2009.2.6. 平成 20 年度特別支援教育研究大 会

2009(H21)	<p>「考える力を育てる」授業づくり 2年次</p> <p>小学部：「できる」喜びを引き出す支援の追及 中学部：「できる」から「わかる」へ深める支援探究 高等部：知識・技能を「つかえる」形に一生活とのつながりを見据えて支援する</p>	2010.1.29. 平成 21 年度特別支援教育研究大会
2010(H22)	<p>「考える力を育てる」授業づくり 最終年次</p> <p>小学部：課題学習と生活単元学習の連係を通して「表現する力」を高める 中学部：相互に作用しあう授業の連係—個別の学習と生活単元学習の関係から 高等部：生活につながる授業づくり—年間目標を軸にした「授業間の連係」</p>	2011.1.28. 平成 22 年度特別支援教育研究大会

\*1 本表では紙数の都合上 2010 年まで記載した。

\*2 『創立 30 周年記念誌 三十年の歩み』(竹本ら編, 2008) と『創立 40 周年記念誌 四十年の歩み』(小林ら編, 2018) ではこの「個人指導プログラムに基づく教育課程の編成」は 1994 (H6) ~ 1995 (H7) 年度の欄に書かれているが、もしかしてミスプリントかもしれない。この論文(山口大学教育学部附属養護学校, 1985) の掲載雑誌『発達の遅れと教育』は 1985 (S60) 年の発行。なお、この論文の末尾には「(文責・天久猛次)」と書かれている。天久猛次は、1979 (S54) 年度から 1987 (S62) 年度まで附属養護学校に在籍した。

\*3 「精神薄弱」という言葉は、1998 (H10) 年 9 月 28 日の「精神薄弱の用語の整理のための関係法律の一部を改正する法律」(施行は 1999 年 4 月 1 日) によって「知的障害」という言葉に統一された。

所見(指導上の留意事項を含む)、IV表は具体的な指導内容と学習集団への所属の決定である。指導カルテについては重田(1988)をも参照。]

個人指導プログラムの評価について言えば、この『障害児教育と個人指導プログラム—教育課程の編成とその実践』の序文において東京学芸大学の山口薫は、「まさに手作りの教育課程の編成をめざして出発し、一人一人の児童・生徒の実態を丁寧にとらえ、確実な指導の在り方まで究明しようとしたものであるということが出来る。そして、特定の養護学校における実践例というだけでなく、障害児教育に共通する課題の解決を示唆するものともなっている。なかでも指導カルテを作成するに当たって、一人一人に対する指導の在り方や指導の評価を重視している点で納得いくものがある」と述べている。[山口薫は 1967 年 9 月から 1 年間精神薄弱児の研究のためフルブライト研究員としてイリノイ大学に留学し、オペラント原理について Sidney W. Bijou の指導を受けた。日本に帰国後は応用行動分析を発展させ、1985 年には日本ポーターズ協会を設立した。]

さらに、天久(1988b)によれば、筑波大学の藤田和弘は『障害児の診断と指導』という雑誌の編集後記で、「個別指導計画の必要性は自明のことである。アメリカではこれを IEP といって、法によってその作成が義務づけられていることは関係者ならだれでも知っているだろう。アメリカで長年障害児教育に携わっている日本人の専門家の一人は、その中身が問題だという。その人によれば、恐らく、本号掲載の山口大学教育学部附属養護学校の個人指導計画の内容は米国のそれよりも優れていると即答するだろう」と述べて、高く評価しているとのことである。

さて、1985 年度内に『障害児教育と個人指導プログラム—教育課程の編成とその実践』が出

版された後も研究は進められた。1986～1988年度の研究テーマは「学習者個々の心理特性に応じた学習指導の改善」であった。

次の1989年度の研究テーマは、「個々の学習者の育ちを見通した学習指導のあり方を探る」であった。ここでいう「育ち」とは子どもたちが附属養護学校に入学してから現在までに伸びた部分ないし停滞している部分のことであり、育ちは子ども自身の内的な力と教師の働きかけとの相互作用の結果である。附属養護学校教育研究会が1990年2月1日に発行した『どう育ったかどう育てるか—個々の子供の育ちの特性を見つめた授業実践の展開』という冊子には、計7名の小学部から高等部の児童生徒の育ちが分析されている。

1990～1993年度の研究テーマは、「今、教育課程を見直す」であった。これは、過去10年間の研究実践と社会の変化を踏まえて、個々の子どもの発達課題をとらえ直し、社会適応をより促すために教育課程を見直すという意味であった。見直しの理由としては次のようなことがあった(岩崎, 1991)。  
①附属養護学校の卒業生の10人中7人以上の生徒がなんらかの職種に就労しているという進路実態からすれば、社会的職業的ニーズを踏まえた教育内容を精選し、充実した作業人格の形成ができるような教育課程を再編成する必要がある。  
②10年間の実践によって蓄積された資料を分析してみると、児童生徒の精神発達、運動発達などの仕方に関する新たな特性が出てきた。このような新たな発達特性に対応するという視点をもって教育課程の再編成をする必要がある。  
③1989(H1)年度に学習指導要領が改訂されたので、附属養護学校の教育課程においてもこの新学習指導要領との整合性をもたせながら教育課程を再編成する必要がある。

次の1994(H6)年度からは個人指導プログラムの諸側面が取り上げられていった。例えば、1996(H8)年度は「個人指導プログラムに基づく学習指導の組織化と展開」という研究テーマが設定され、その1年次(1996年度)には「児童生徒の課題と生活から週課表を見直す」という研究課題が取り組まれた(山口大学教育学部附属養護学校, 1997)。

ところで、大変評価の高かったこの個人指導プログラムに基づく教育課程は2002(H14)年度から見直されることとなった。それについて、研究主任の丸山敦子は以下のように解説している(丸山, 2008)。

「本校は、創立以来一貫して、子ども一人一人の発達を適切に支援する教育の探求と実践に関して研究を推進してきました。それが一つの形として結実したものが、本校独自の『個人指導プログラム』に基づく教育課程でした。学部や学年にとらわれない、個人の実態や課題に応じた教育課程は、個の実態に応じた支援を行ううえで有効であり、システムとしては完成度の高いものでしたが、本校独自の領域・分野によって構成されており、その名称等が特殊であるがゆえに広く共通化、一般化しにくいという側面をもっていました。また、生活年齢にとらわれない集団づくりということから、同年齢の集団による活動が希薄になり、子どもの年齢に応じた自尊心や責任感、集団への所属感を存分に育てることが難しいこともでてきました。小学部は小学生として、中学部は中学生として、高等部は高校生として、それぞれの子どもの年齢に応じた生活経験を大切に、同年齢の集団の中での年齢に応じた自尊心や責任感を育てていくことを大切にする教育課程づくりをめざす必要が感じられました。そこで、平成14年度から、これまでの『個人指導プログラム』の良さを生かしながらも、他の支援学校等とも共有できる教育課程づくりが必要で

あると考え、学部単位の教育課程の改訂に取り組み、研究を進めることとなりました。」

丸山以外では、「平成16年度 障害児教育研究発表会」の資料（松田編，2005）において、「本校では14年度から教育課程の見直しを図ることになり、実態別学習集団編制から学部制に移行し、本校独自の内容をもつ個人指導プログラムから学習指導要領に準じた内容名称に変更となった。従来の教育課程は個別のスキルアップに重点がおかれていたため、『領域・教科を合わせた指導』としての生活単元学習は行われてこなかった。そのため、名称変更だけでなく、教育課程全体を新しい視点で見直すことになった。」「従来の『個人プログラム』に基づく教育課程においては、一人一人の発達課題を中心とした学級集団づくりを基本としており、生活年齢にとらわれない、学部を超えた学級編成や本校独自の領域・分野の設定を行ってきた。この本校独自の教育課程はこれまでに多くの成果を残してきたが、反面、生活年齢に即した生活づくりという面が希薄になっている部分もあった。」と説明されている。

その後、2005（H17）年度からは3か年計画で、児童生徒の「教育的ニーズ」に基づく「個別の教育支援計画」ならびに「個別の指導計画」の適切な策定と、これらの計画に根ざした授業づくりについての研究が開始された。

## 2. 障害児教育におけるパソコンとタブレット情報端末の利用

### （1）パソコンの利用

附属養護学校では1996（H8）年3月20日に情報教育用パソコン8台が視聴覚室に設置され、5月1日には、マルチメディア対応ATMネットワークシステムの導入に伴って山口大学の学内LANへの接続が行われると同時に、附属養護学校内の情報ネットワークの構築がなされた。具体的に言えば、事務室・視聴覚室・印刷工室・3つの職員室（教室）をそれぞれLANで結び、さらに視聴覚室内では、児童生徒用4台、教師用1台、教材作成用1台、サーバー用2台がネットワークに接続された（舩谷，1999）。パソコンを用いる児童生徒は知的障害などの障害を有しているため、入力には通常のキーボードの他、代替キーボード（キネックス）やタッチパネルでも入力できるようにした。そして、言葉の学習の時間やクラブ活動（パソコンクラブ）の時間を利用して、児童生徒たちが「ふよう」（児童生徒用の校内電子板）に書き込めるようにした。

### （2）iPad2の利用

これは附属養護学校が附属特別支援学校に改称されて以後のことになるが、Apple社のiPad2が日本では2011（H23）年4月に発売された。附属特別支援学校では、財団法人山口大学教育後援財団「学生の就職支援・教育環境の改善・留学生の支援等助成事業」の支援を受けて、計12台のiPad2と15台のiPod touchを導入し、2011年度は主として小学部においてiPad2を活用した授業実践を行った（刀衾ら，2012）。具体例を挙げれば、小学部5年生の男子Fに対してはそれまではPECSを用いたコミュニケーションを行っていたが、PECSで使われる実際のカードに比べてより持ち運びが容易で、しかも音声出力が可能なアプリ「絵カード・コミュニケーション」をiPad2に入れたところ、FはすぐにiPad2を操作するようになり、やがて音声出力に頼る代わりに自分で発語して、相手に正確に要求を伝えられるようになった。

## 3. 附属養護学校における研修

附属養護学校における研修としてはまず、附属養護学校に新しく着任してきた教員に対する研

修（新着任教員対象研修会）がある。

研修の第二としては、山口県教育委員会と連携して受け入れた短期（3か月）ないし長期（1年）の研修生に対する研修がある。附属養護学校は1980年5月12日に新校舎に移転して以来、短期・長期の研修生（現職教員）を受け入れてきており、彼らに対する研修内容も少しずつ工夫されてきている（清永ら，2003；川合ら，2006を参照）。[もともと附属養護学校は、附属養護学校が設立された翌年の1980年4月1日に、山口県教育委員会からの依頼で公立学校教員2名を研究生として受け入れている（国久ら編，1988）。]

3か月間の研修という一見短い感じもするが、研修の目的が明確なら効果は高い。例えば、中学校の知的障害の特殊学級担任の中城眞澄は「知的障害児の授業のねらいと組み立て方はどのようなものか」という研修テーマのもとに2002年度に附属養護学校で短期研修を行った（中城，2004）。具体的には、中城が担任をしている生徒と発達段階や課題が似通っているような生徒2名を選んで国語の公開授業を行い、その後検討会を開いてもらった。その結果、中城は研修テーマに対して一つの解答を得ることができたという。

研修の第三として、附属養護学校の教員の専門性を高める研修がある。これは、例えば2004（H16）年度であれば、①5月から7月にかけて計5回、光市立三井小学校教諭の西川麻里子（特別支援教育士）に「LD」「ADHD」「HFPDD」「校内の支援体制づくり」などについて実技を交えて講義してもらい、②夏休休業中には、国立特殊教育総合研究所での3か月間の短期研修（2004年度の知的障害教育コース）を終えた附属養護学校教諭の青木洋子の研修報告と、③熊本大学教育学部の干川隆による「連携と協力のためのワークショップ—PATHの演習」が行われている（松田編，2005）。[干川が行ったPATHは、Falveyらによる*Planning Alternative Tomorrows with Hope*の略である（Falvey et al., 1997）。]

研修の第四は、学外での研修である。例えば、上述の青木が研修した国立特殊教育総合研究所（2007年度から独立行政法人国立特別支援教育総合研究所）には、同じ附属養護学校の丸山敦子が2005年度の1年間、長期研修員として研修に赴いている（丸山の長期研修報告書のタイトルは「障害のある子どものよりよい授業づくり：主に知的障害養護学校における授業づくりの視点」）。このような研修は、青木や丸山にとっては学外研修ということになる。

#### 4. 教育相談活動

山口県内の特殊学級や盲・ろう・養護学校に在籍している児童生徒の保護者たち計327名を対象とした木谷ら（2002）の調査結果では、保護者はその82%が外部から相談できるシステムがあれば利用したいという希望を有していた。附属養護学校では以前から保護者からの相談にのってはいたが、教育支援部教育相談担当であった戸崎加寿雄が作成した資料等によると、附属養護学校の定期的な教育相談活動は以下の3つである（戸崎，2009）。

（1）「のびのび」（個別教育相談活動）：「のびのび」は2003（H15）年度から開始された個別の相談活動で、未就学児から18歳児までが対象。附属養護学校に通っている児童生徒や保護者も対象に入る。1回の相談時間は1時間程度で無料。相談には個室が必要なため、芙蓉館の二階が使われる。相談にあたるのは附属養護学校のスタッフの他、山口大学教育学部の障害児教育や心理学の教官である。児童の出身地域は、山口市、防府市、宇部市など。延べ利用件数は、2003

表4 2004年に高等部3年生が取り組んだ進路学習\*1

月 日	内 容	備 考
4月中	家庭学習	高等部卒業後の進路・社会生活について家族と話し合い、自分の思いや願いを確認する。
4/30	進路相談会	卒業後の進路・生活についての思いを関係機関、学級担任、進路担当者に伝える。
5/31, 6/3	進路学習の時間*2	決定した実習先について実習内容や通勤方法をワークシートに記入しながら確認する。
6/7~11	プレ実習	附属養護学校のなかの作業班*3で終日作業する。
6/14~16	前期現場実習事前学習	
6/17~30	前期現場実習	
7/1~2	前期現場実習事後学習	各学級で現場実習を振り返ったり、現場実習報告会で発表したりする。
7/9	進路学習の時間	公共職業安定所や福祉事務所に4月30日の進路相談会で相談した人を訪ね、現場実習の報告をする。
7/15	進路学習の時間	家庭で夏休みに取り組む手伝いについて考える。
7/21~8/31	自分の生きる道について考える	(生徒によって異なるが) 夏期現場実習、施設見学、原動機付自転車の講習、障害者技能競技大会に向けての練習など。
9/10・13・16	進路学習の時間	後期現場実習について考える。
9/17・24	進路学習の時間	進路指導懇談会での発表のまとめ。
9/27	進路指導懇談会	施設職員、関係機関、大学、保護者、高等部生徒などに対して「これが私の生きる道」を発表。
10/25	職場見学事前学習	
10/26	職場見学	リネンの会社の見学、グループホームや通勤寮での生活の見学。
10/27	職場見学事後学習	職場見学のまとめ。
11/4	進路学習の時間	将来の生活をより具体的に考える。
11/8	進路学習の時間	現場実習の目標を具体的に考える。
11/15~11/19	プレ実習	現場実習を意識して1日めいっぱい作業班で働く。
11/24	現場実習事前学習	
11/25~12/7	後期現場実習	
12/8・9	後期現場実習事後学習	

\*1 2004年4~12月の進路学習を記載した。2005年に入ると1月の「冬季現場実習」(2週間)、「進路学習の時間」、移行支援としての「進路連絡会」(3月4日)等がある。

\*2 「進路学習の時間」(総合的な学習の時間)は中学部3年生の段階から設けられている。

\*3 作業種目としては布工・木工・紙工・陶工の4つがあり、生徒たちはどれかを選択する。

年度が22件、2004年度52件、2005年度82件、2006年度106件、2007年度144件、2008年度115件である。2007年度が多かったのは、相談にあたる教員数や、幼稚園・小中学校への巡回相談が多かったことによる。

(2)「わくわく」(幼児教育相談室):「わくわく」は2006(H18)年度から開始された小集団の療育活動で、造形遊び、水遊び、音楽遊び、運動遊び、調理活動、絵本読みなど。活動の流れは、例えば、「入室」→「はじまりの歌」→「今日のスケジュールの確認」→「おもちをつくろう」→「おもちを食べよう」→「遊ぼう」→「絵本」→「終わりの会」といったもの。附属養護学校のスタッフ3名(後には4名)とボランティアで運営。芙蓉館、プール(夏期)、体育館、中庭が使用される。時間は1回2時間程度。対象児は山口市や防府市の未就学児(年長が主体)で、毎年7名前後の参加者がいる。子どもたちには附属養護学校のスタッフや山口大学教育学部の学

生・院生ボランティアが、保護者たちには附属養護学校のスタッフが対応する。2006年度は18回、2007年度は19回、2008年度は21回開催されている。[幼児教育相談室「わくわく」は2015(H27)年10月に幼児発達支援室「ヤマミィるーむ」となった(ヤマミィとは山口大学のキャラクター名)。週に1回、年少・年中グループ(5名程度)と年長グループ(5名程度)に対する小集団の療育活動がなされている。]

(3) その他の教育相談活動：電話による相談、ミニ講演会など。

## 5. 進路学習

国久ら編(1988)によれば、社会参加のための適応能力を高めるためには校内での学習だけでは不足するため、年2回の現場実習が行われた。対象は中学部3年生以上で、前期・後期とも2週間。ただし、最終学年の高等部3年生については、1982(S57)年の秋から3週間の現場実習が行われた。3年生についてはまた、夏休みの臨時実習や、同一事業所における継続的実習も行われた。なお、現場実習の実習先は1980(S55)年度は前期のみの一か所であったが翌年度から徐々に増えていき、1980年度から1988年度前期までで延べ事業所・施設数は218か所にのぼり、参加生徒は414人に達した。実習先には、山口大学の農学部附属農場、食堂、経理課管理係なども含まれていた。[山口大学での実習先は当初はほんの数か所であったが、やがて山口大学のすべての学部や施設に及ぶようになった。ちなみに、山口大学の情報環境部で現場実習を行った高等部3年生の男子生徒が、2008年4月1日から情報環境部に雇われた。1日6時間、週5日の契約で、山口大学では初めてのことであった。]

ところで、附属養護学校は2001年から5年間、山口大学教育学部障害児教育教室と知的障害児の進路学習、それも特に高等部3年生の進路学習のあり方について検討した。2004(H16)年度に実践された高等部3年生の進路学習は表4のようなものであった(吉田ら、2005;松田編, 2005)。ここでは現場実習も含めて、大変きめの細かい進路学習がなされている。

## IV 山口大学教育学部附属養護学校(附属特別支援学校)と教育学部との連携

附属養護学校(2007年度から附属特別支援学校)は、山口大学教育学部から歩いて5分くらいのところにある。このように距離が非常に近いので、附属養護学校の教員が教育学部の障害児教育(特別支援教育)の教官に直接アドバイスや指導を受けたり、附属養護学校と教育学部が何か特定のテーマで共同研究したりするのに都合がよい。それにもともと、1980年度から、各年度の終わりごろの2月に特殊教育研究協議会、特殊教育研究発表会、さらには障害児教育研究協議会、障害児教育研究発表会が開催されてきたが、これらには教育学部の特殊教育・障害児教育の教官たちが深く関わってきたのである。

特に近年は教育学部と附属学校園との研究連携が強くうたわれているところなので、附属特別支援学校と教育学部との共同研究は今後増えていくものと思われる。

ところで研究という場合、教育課程の研究や授業研究はともかくとして、問題行動の消去、新しい行動の形成、特定の支援プログラムの適用といった臨床分野の研究では、研究にまつわる倫理が重要となってくる。その意味では、例えば第一研究者たる担任が保護者や児童生徒に研究内容を説明して同意を得る、もしも途中で何か不都合があれば教師や保護者にはその研究中断す

る権利があることを保証する、研究の成果を公表する場合には児童生徒・保護者のプライバシーの保護に努める、成果の公表には剽窃などを疑われる記述がないよう留意する、といったことが大切となろう（後藤ら，2012；安富ら，2012；鑑，2018を参照）。

## V おわりに

現在の山口県内の12の特別支援学校はすべて総合支援学校という名称であるが、山口大学教育学部のみ附属特別支援学校である。総合支援学校が原則5障害に対応するのに対して、附属特別支援学校は附属養護学校の時からずっと知的障害（知的発達症）に対応している。もっともこれは知的障害を主障害にするという意味で、知的障害のみでなく、自閉スペクトラム症、注意欠如多動症、限局性学習症、二分脊椎などを伴う児童生徒がいるし、自閉スペクトラム症のなかには知的障害のない高機能自閉症の児童生徒もいて、多様である。

本稿ではもっぱら附属養護学校に焦点をあて、附属養護学校の設立時の出来事や歴史、附属養護学校の諸活動について述べた。

最後に一言触れておくと、附属養護学校のさまざまな行事や活動の円滑な進行は、歴代のPTAの会長・副会長ならびに厚生部・文化部・広報部の影の尽力によるところが大きい（第1回PTA総会は1980年4月30日）。また、毎日の学校給食は子どもたちにとって大きな楽しみであるが、その背後には給食調理員たちの地道な努力がある（附属養護学校における学校給食の開始は1980年6月2日）。

[付記] 資料の収集に関して山口県立山口図書館の他、上田文男・大木一久・古田千鶴江・堂野佐俊先生、表記に関して松田信夫先生にお世話になりました。記して深謝いたします。

## 文献

- 天久猛次（1988a）研究あれこれ（国久邦人・藤三和子・江川よしみ・岸本文雄編，創立10周年記念誌 十年の歩み，山口大学教育学部附属養護学校発行，34-36）
- 天久猛次（1988b）個人指導プログラムによる教育—科学的な発達診断と授業の科学化（山口県特殊教育連盟編，昭和62年度研究紀要，第14回全日本特殊教育研究連盟中国地区研究大会（山口大会）集録，山口県特殊教育連盟発行，26-29）
- Falvey, MA., Forest, M., Peapoint, J., Rosenberg, RL（1997）*All my life's a circle. Using the tools: Circles, MAPS & PATHS*. Toronto, ON: Inclusion Press.
- 福原修二（1998）創立当時の思い出（三輪研一郎・田中みぎわ・森本和子・宮城啓子・磯田和秀・丸山敦子編，創立20周年記念誌 二十年の歩み，山口大学教育学部附属養護学校発行，47）
- 古田千鶴江（1990）健康管理について（山口大学教育学部附属養護学校PTA広報部編，PTAだより ふよう，28，5）
- 古谷正明（1988）私の附養第1期生（国久邦人・藤三和子・江川よしみ・岸本文雄編，創立10周年記念誌 十年の歩み，山口大学教育学部附属養護学校発行，44）
- 後藤典子・須藤邦彦・松岡勝彦（2012）発達の遅れを伴う児童における写真カードを用いた選択行動の形成—附属特別支援学校と大学との行動コンサルテーションを通じた連携に向けて 山口大学教育学部 研究論叢，61，第3部，207-215.
- 原田剛・佐藤智朗・藤井論・中山愛理（編）（2018）山口芸術短期大学創立50周年記念誌 山口芸術短期大学発行
- 入枝脩（1988）創立10周年を迎えて（国久邦人・藤三和子・江川よしみ・岸本文雄編，創立10周年記念誌 十年の歩み 山口大学教育学部附属養護学校発行，59）
- 石本正之（1998）朝の日課（三輪研一郎・田中みぎわ・森本和子・宮城啓子・磯田和秀・丸山敦子編，創立20周年

- 記念誌 二十年の歩み, 山口大学教育学部附属養護学校発行, 50)
- 岩崎貞徳 (1991) はじめに (山口大学教育学部附属養護学校, 平成2年度版学習内容一覧表改訂資料集, 山口大学教育学部附属養護学校発行)
- 岩崎貞徳・吉田一成・松田信夫・佐々木光雄 (1991) 精神遅滞児の作業人格の発達に関する分析—「改訂版山口職リハ研式調査票」にみる精神年齢5歳の作業人格の発達を中心にして 職業リハビリテーション, 4, 9-20.
- 亀井定雄 (1969) 本県における特殊教育推進のための教員養成について (山口県教育委員会・山口県特殊教育連盟編, 山口県特殊教育研究紀要, 山口県教育委員会・山口県特殊教育連盟発行, 59-62)
- 亀井定雄 (1971) 本県特殊教育の振興充実に想う (山口県教育委員会・山口県特殊教育連盟編, 山口県特殊教育研究紀要, 山口県教育委員会・山口県特殊教育連盟発行, 23)
- Kanner L (1943) Autistic disturbances of affective contact. *Nervous Child*, 2, 217-250.
- Kanner L (1944) Early infantile autism. *Journal of Pediatrics*, 25, 211-217.
- Kanner L (1972) *Child psychiatry. Fourth Edition*. Springfield, Illinois: Charles C Thomas Publisher. (黒丸正四郎・牧田清志訳, 1974, カナー児童精神医学 第2版, 医学書院)
- Kanner L (1973) *Childhood psychosis: Initial studies and new insights*. New York: Winston/Wiley. (十亀史郎・斎藤聡明・岩本憲訳, 1978, 幼児自閉症の研究, 黎明書房)
- 川合宏史・古志野智香・高田和美・松尾秀成・吉田一成・松田信夫・松岡勝彦 (2006) 附属養護学校における研修システムの充実2 山口大学教育学部 学部・附属教育実践研究紀要, 5, 87-94.
- 木谷秀勝・重田一郎・小田耕一・空井和子・戸崎加寿雄・福田隆眞・横山省三 (2002) 附属養護学校における教育相談システムの開発 山口大学教育学部 学部・附属実践研究紀要, 2, 161-172.
- 清永直志・伊藤里美・丸山敦子・川合宏史・吉田一成・松田信夫・川間健之介 (2003) 附属養護学校における研修システムの充実 山口大学教育学部 学部・附属教育実践研究紀要, 3, 201-212.
- 小林英樹・大島和子・齊藤友和・藤本貴子・清水由美子・廣石志都子・藤井和恵・栗屋真由美・板持春那・村田仁志・小野香織・前田里絵・甲斐代子・齋藤登志 (編) (2018) 創立40周年記念誌 四十年の歩み 山口大学教育学部附属特別支援学校発行
- 小西俊造 (1965) 小児科学提要 金原出版
- 小西俊造 (1976) 小児科学提要 改訂第2版 金原出版
- 国久邦人・藤三和子・江川よしみ・岸本文雄 (編) (1988) 創立10周年記念誌 十年の歩み 山口大学教育学部附属養護学校発行
- 丸山敦子 (2008) 30年目の研究とこれから (竹本寛子・青木洋子・伊藤篤男・金丸里絵・國重茂美・小林英樹・高田和美・中嶋敦子・松村淳子・舛井敦子・真部信吾・丸山敦子・山本愛枝編, 創立30周年記念誌 三十年の歩み 山口大学教育学部附属特別支援学校発行, 35)
- 舛谷晃 (1999) 障害児教育におけるパーソナルコンピュータのネットワーク的利用 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 10, 17-28.
- 松田信夫 (編) (2005) 平成16年度障害児教育研究発表会<研究紀要 第11号> 一人一人が生き生きと学習する授業づくりを目指して (最終年次) 山口大学教育学部附属養護学校発行
- 三輪研一郎・田中みぎわ・森本和子・宮城啓子・磯田和秀・丸山敦子 (編) (1998) 創立20周年記念誌 二十年の歩み 山口大学教育学部附属養護学校発行
- 中村恒愛 (1988) 附養 高等部のスタート (国久邦人・藤三和子・江川よしみ・岸本文雄編, 創立10周年記念誌 十年の歩み, 山口大学教育学部附属養護学校発行, 43)
- 中城眞澄 (2004) 知的障害児の授業のねらいと組み立て方—平成14年度附属養護学校での短期研修から (山口県特別支援教育研究連盟, 平成15年度研究紀要, 70-76)
- 眞田元祐 (1965) アメリカ教育の諸事情 精神薄弱児教育について—ノース シラキュウス学区における (国際教育会編, 現場教師の見たアメリカの教育 '64年度米国短期留学報告集, 313-323)
- 眞田元祐 (1971) 特殊教育係新設のころ (山口県教育委員会・山口県特殊教育連盟編, 山口県特殊教育沿革史, 65-66)
- 眞田元祐 (1988) 附属養護学校創立の頃 (国久邦人・藤三和子・江川よしみ・岸本文雄編, 創立10周年記念誌 十年の歩み, 山口大学教育学部附属養護学校発行, 9)
- 眞田元祐 (1998) 附属養護学校の発展を祝して (三輪研一郎・田中みぎわ・森本和子・宮城啓子・磯田和秀・丸山敦子編, 創立20周年記念誌 二十年の歩み, 山口大学教育学部附属養護学校発行, 13-14)
- 重田一郎 (1988) 一人一人の実態に応じた教育課程の編成とその実践—生活単元学習をこのようにとらえる (山口県特殊教育連盟編, 昭和62年度研究紀要, 第14回全日本特殊教育研究連盟中国地区研究大会 (山口大会) 集録, 山口県特殊教育連盟発行, 72-88)
- 竹本寛子・青木洋子・伊藤篤男・金丸里絵・國重茂美・小林英樹・高田和美・中嶋敦子・松村淳子・舛井敦子・真部

- 信吾・丸山敦子・山本愛枝（編）（2008）創立 30 周年記念誌 三十年の歩み 山口大学教育学部附属特別支援学校 発行
- 鐘幹八郎（2018）心理臨床家の倫理（鐘幹八郎・名島潤慈編著，心理臨床家の手引 第 4 版，誠信書房，20-32）
- 刀祢龍樹・原田守・小林英樹（2012）タブレット情報端末（Apple 社 iPad，iPod touch）活用事例集 山口大学教育学部附属特別支援学校発行
- 戸崎加寿雄（2009）教育支援部 教育相談活動について 「平成 21 年度附属学校園計画訪問」の中の資料 4
- 上田文男（1988）創立のころ（国久邦人・藤三和子・江川よしみ・岸本文雄編，創立 10 周年記念誌 十年の歩み，山口大学教育学部附属養護学校発行，10）
- 上田文男（1998）創立 20 周年に想う一教職員 OB として（三輪研一郎・田中みざわ・森本和子・宮城啓子・磯田和秀・丸山敦子編，創立 20 周年記念誌 二十年の歩み，山口大学教育学部附属養護学校発行，18）
- 上田文男（2018）personal communication.
- 山口大学教育学部附属養護学校（1985）個人指導プログラムに基づく教育課程の編成 発達の遅れと教育，324，64-77.（文責・天久猛次）
- 山口大学教育学部附属養護学校（1991）平成 2 年度版 学習内容一覧表改訂資料集 山口大学教育学部附属養護学校 発行
- 山口大学教育学部附属養護学校（1997）平成 8 年度障害児教育研究協議会 研究資料集 個人指導プログラムに基づく学習指導の組織化と展開（1 年次） 児童・生徒の課題と生活から週課表を見直す 山口大学教育学部附属養護学校発行
- 山口大学教育学部附属養護学校（編著）（1986）障害児教育と個人指導プログラム—教育課程の編成とその実践 第一法規
- 山口大学教育学部附属養護学校教育研究会（1990）どう育ったか どう育てるか—個々の子供の育ちの特性を見つめた授業実践の展開 山口大学教育学部附属養護学校発行
- 山本正（2007）「市民外交」の伝道師 2007 年 5 月 15 日 日本経済新聞夕刊
- 安富正人・松岡勝彦（2012）通常の学級に在籍する特別な教育的ニーズのある児童における指示従事行動の生起条件 山口大学教育学部研究論叢，61，第 3 部，347-354.
- 吉田一成・松田信夫・泉裕志・松尾秀成・磯田和秀・中嶋敦子・山本愛枝・山中正巳・青木洋子・山本啓子・空井和子・福隅隆行・厚東泉（2005）知的障害児・者の進路学習について—一人一人の思いや願いを大切にされた進路学習のあり方 山口大学教育学部 学部・附属教育実践研究紀要，4，207-228.